

学園ニュース

富山大学

No.40

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和 57 年 12 月 15 日



学内風景(その5)工学部構内 西 紀子

目次

工学部の五福移転統合問題に関する報告 I … 富山大学工学部移転促進小委員会委員長 柳田友道 ……	2
雑 感 …… 経済学部長 棚田良平 ……	2
新任教官紹介及びあいさつ ……	3
ドイツ滞在記 …… 人文学部教授 提山淑郎 ……	6
JAPANESE AS INDUSTRIOUS PEOPLE(a part of my diary) …… Atiq Susilo ……	8
MY IMPRESSION ON THE STUDENT CAMPING TRIP OF THE FACULTY OF EDUCATION TOYAMA UNIVERSITY …… Faridal Arkam ……	9
私の西ドイツ留学 ……教育学部小学校教員養成課程(教育心理学) 東山弘幸 ……	10
昭和 57 年度教員養成課程合宿研修を終えて …… 実行委員長 定村 誠 ……	10
教育実習(小学校・中学校・養護学校・幼稚園) ……	11
学部, 保健管理センター, 学生部だより ……	13

工学部の五福移転統合問題に関する報告 I

富山大学工学部移転促進小委員会委員長 柳 田 友 道

工学部の五福移転統合は、昭和 39 年の工学部教授会決定、昭和 41 年の本学評議会における機関決定によって方向付けされた。その後工学部をはじめ、大学側はその実現を期して並々ならぬ努力を続けてきたが、紆余曲折を経ながら、今日に至るまでその実現を見ることなく、ただ時間のみが過ぎ去っていった。このように本計画が長期にわたって実施できなかったのは、大正 13 年に高岡高等商業学校が創設されて以来、高岡工業専門学校を経て、富山大学工学部に至るまでの歴史的経緯に照らし、地元高岡市住民の工学部に対する愛着の念にはほだし難いものがあり、本学としてこれを無視するわけにはいかなかったからである。地域社会に根ざした大学を指向する本学としては、この難問題を処理するに当たって、あくまでも地元との十分な話し合いによって、両者納得の上で解決すべきものと考え、時間をかけて対処してきたのであった。しかしその間、工学部教職員並びに学生諸君に対し、教育研究上のみならず、その他の点でも多大の迷惑をかけたことは否定できない。

本学と地元関係者との間で根気よく話し合いが続けられてきた中から、工学部の五福移転を契機として、これに代る国立高等教育機関を高岡市に設置するという問題に関する検討が進められ、現在進行中の高岡産業短期大学（仮称）設置計画が昭和 54 年度以降、文部省の阻入りで年次を追って着々と進められつつあることは周知のとおりである。そしてその計画の推進と並行して、工学部移転統合問題も当事者間で熱心に話

し合われてきた。

昭和 56 年 11 月 27 日、富山県と高岡市当局は高岡産業短期大学の設立を促進するために、その趣旨及び経緯を考慮して、文部省に対して幾つかの提案を行った。その中に工学部の移転統合と関連して、富山県と高岡市は富山大学に関する次のような提案を行っている。すなわち工学部が現在使用中の運動場の一部を早急に譲渡してほしい。その譲渡の協議が関係機関との間で終了した時点で、工学部の五福移転統合を実施に移すことを了承するという主旨のものであった。（なお地元側はその土地に県民会館を設置する予定と聞いている）。この提案に対して本学としてはこれを工学部並びに正課体育の教育に携わる教官に諮ったところ、工学部移転準備開始を条件に理解ある解答が得られたので、学内関係委員会の議を経てこれを受諾することとした。本年 6 月 30 日、富山県と高岡市はさきの 11・27 提案に沿って、富山大学に対して工学部運動場の一部（6,183 ㎡）譲渡に関する土地売払要望書を提出した。以来種々の手続を踏んで、ようやく本年 11 月 29 日に行われる予定の大蔵省北陸財務局主催の会議で、その売り払いが正式に認められる運びとなった。

工学部の五福移転統合は、本学の長年にわたる悲願であった。その間多くの犠牲を払ってきたが、文部省の指導並びに地元関係者の協力によって、ここにようやくそれに向けて更に一步前進することとなってきた。ここに従前の経緯を報告し、今後とも必要な事項は報告していく所存である。

雑 感

経済学部長 棚 田 良 平

学園ニュース編集委員より学部長就任の抱負を書けとのこと指示を受けた。もともと単細胞で日頃考えることが少なく、かつ研究以外に大学人の価値を感じない小生に抱負などあろうはずがない。そのうえ、とかく「ひとこと」多い性格でもある。できるならば、執筆をご辞退したい。しかし、それでは悪い先例を残すことにもなりそうで、元編集委員の小生としては悩むところである。そこで、若干の雑感を述べて責任逃れを

させて戴く。ご寛容願いたい。

(1) 蝶と毛虫 人間をながくやっていると、小生のような者にも生活信条や人生哲学といったものが生れてくる。『より自由で豊かな精神生活を送るためには「チョウ」になるな』この世にはさまざまな「チョウ」がある。社チョウ、会チョウ、局チョウ、部チョウ、課チョウ、係チョウ、市チョウ、町チョウ、村チョウ、組チョウ、級チョウ、団チョウ、班チョウ、隊

チョウ、座チョウ、委員チョウ、議チョウ、コックチョウ、ボーイチョウ、大腸、小腸、盲腸、ダ鳥、ガ鳥、九官鳥、アゲハ蝶、モンシロ蝶、夜の蝶一。いずれの「チョウ」も大変なのだ。蝶になるより毛虫のままですと置いていたら、とうとう学部チョウになってしまった。もう勉強ができない。この先どうしよう？

(2) 受験勉強 入学試験は昔もひどかった。この年令になった今でも、うなされることがある。夢のなかに若き日の美少年のわたくしとややつかれた現在のわたくしが登場する。「もう起きてやらなければ一」とあせる若き日のわたくしを、今のわたくしが「君はすでに合格してもう卒業もしたのだ。大学の教官になっているのだ。いまは試験を受ける側でなくて、試験をする側なのだ」となだめる。それを聞いて若き日のわたくしは、再び安らかな眠りにつく。「オノケイ」「赤尾の豆タン」「〇〇のあたま」一。いやだったなあ。しかし、小生の学力を増進させてくれたのは受験勉強だった。断じて学校での授業ではなかった。

(3) 悪ガキの弁 小学校以来、一度も良い子のグループに入れてもらえなかった小生である。廊下に立たされたり、罰そうじをやらされたり一。「こんな子は将来ろくなものにならない」というのが先生の定評であり、学校へ呼び出される両親の嘆きであった。しかし、今日になって昔の仲間を見ると、大きな社会

的貢献をしている者はむしろ悪ガキのほうに多い。

「良い子イコールろくな者」、「悪ガキイコールろくなでなし」という方式は成り立っていない。社会の平穩は規律、さだめ、申し合せ、掟、しきたりの遵守によって保たれる。しかし、社会の進歩はこれらの否定によってもたらされる。悪ガキはこの役割を背っているのだ、というのが小生の自己弁護である。

(4) 活動写真 わたくしどもの青春時代における最大の（人によっては唯一の）娯楽は活動写真であった。モロッコ、巴里の屋根の下、間諜X 27、三文オペラ、制服の処女、街の灯、会議は踊る、にんじん、或る夜の出来事、商船テナシチー、未完成交響楽、外人部隊、ベンガルの槍騎兵、白き処女地、ミモザ館、地の果てを行く、幽霊西へゆく、將軍暁に死す、女だけの都、歴史は夜作られる、大地、オーケストラの少女、モダン・タイムス、舞踏会の手帳、望郷、わが家の楽園、格子なき牢獄、民族の祭典、美の祭典、駅馬車、スミス氏都へ行く、世界に告ぐ一。これら活動写真の主人公に自分を置きかえ、きたるべきロマンスなどに備えたのであるが、期待に反し青春は音もなく過ぎ去ってしまった。わが仲間よ。ともに青春を葬ろうではないか。

お粗末でした。オシマイ。

===== 新 任 教 官 =====

<p>○松川 三郎 助教授（教育学部） 57. 6. 1 昭 34. 3 福井大学工学部繊維染学科卒業 （昭 56. 6. 30 工学博士） 担当：被服学</p> <p>○山西 潤一 講師（教育学部附属教育実践研究指導センター） 57. 6. 1 昭 53. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程単位取得退学 （昭 55. 3. 25 工学博士）</p> <p>○屋敷 平州 教授（教育学部附属教育実践研究指</p>	<p>導センター） 57. 6. 16 昭 19. 9 京都帝国大学文学部哲学科卒業</p> <p>○高橋 ^{はじめ}一 助教授（経済学部） 57. 9. 1 昭 54. 8 一橋大学大学院経済学研究科博士課程退学 担当：計量経済学</p> <p>○吉村 敏章 助手（工学部） 57. 6. 1 昭 51. 9 大阪市立大学大学院工学研究科博士課程修了 担当：応用物理化学</p>
--	---

新任のごあいさつ

教育学部助教授 松川三郎

6月1日付けで赴任しましてから、早や半年になろうとしております。福井大学の工学部に22年間奉職

致しまして可成りの古参組と自他共に認めておりましたので、「まさか彼が転勤するとは!？」と周囲の人々

を驚かせました。明治以来、国を富まし民を潤して来た繊維産業も次第に斜陽化し、大学の繊維系学科が全国的に脱繊維、学科改組を行っております。それとともに、繊維関係の研究者の多くが機能性材料や、生体高分子材料関係の研究に方向転換しております。この様な時、繊維をライフワークにしている私は、生産に直結した工学部から一步外に出て、より広い視野で繊維を眺め、人間社会に対してより合理的に貢献し得る繊維の姿を追求しようと決意しました。研究者と教育者の“両刀遣い”である大学教官としては工学部から教育学部への転身は誠に恵まれた境遇と深く感謝致しております。一般的に見て、大学ではともすると知識や技術を教えることにのみ重点を置き、人格の高揚を軽視した教育を行う事があるのではないかと考えられる風潮があります。二・三日前、郷里の福井で弁護士をしている義弟で中々の理屈屋さんと宴席を共にした

時、「教育学部での今後は研究と教育のどちらにウェートを置くつもりか」と質問されました。即座に、「真二つにする積りだ」と答え、続発しそうな質問をかわしました。研究と教育は車の両輪の如くであることは学部の如何を問わず共通している筈であり、その点で義弟も共鳴してくれたものと思います。

幸い富山は気候・風土が福井と殆ど変わらず、恐らくこれから迎える冬将軍も同じ様に厳しい事と予想しています。福井と違って関西からの影響、特に悪影響を殆ど受けずに発展された様で、勸奨の意味の「～せられ」と云う言葉使いと共に古き良き日本人の「心」が残されていると思います。折を見てくりから峠の古戦場跡や、山村に残る平家村など数多い名所旧蹟に接し、英気を養い、研究・教育に精励致す所存であります。よろしくお願い申し上げます。

(57年11月上旬)

ごあいさつ

教育学部附属教育実践研究指導センター講師 山西潤一

本年6月1日付けで、新設された教育学部附属教育実践研究指導センターに着任いたしました。新しい研究センターで研究が行える喜びとともに、その責務の重さをひしひしと感じている今日この頃です。

もうかれこれ10年前になります。富山大学で電気工学を学び、その中で生物、とりわけ人間の情報処理システムの素晴らしさに心がひかれ、大阪大学に進み生物工学を専攻しました。脳における認知過程や学習過程等を数学的手法や情報処理的手法で研究しましたが、この学問はまったくの学際領域であります。医学、生物学、心理学、数学、電気工学、情報工学等々、役立ちそうなものは何でも取り入れています。学問の枠などありません。皆、時に生物屋を自称し、時に電気屋を自称したものです。よく言えば、この学問がそれだけフレキシビリティに富んでいるということでしょうし、人間を理解するには、一朝一夕の方法論では歯が立たないということでしょう。

さて、ここ教育実践研究指導センターは、これまでの教育工学の反省の上に生まれたセンターと聞きます。

工学というと、すぐ最新の機器（近年ではコンピュータ）を導入し、何でもかんでもコンピュータに頼る風潮が強いです。情報化社会が進み、家庭にいながら、大型コンピュータが使える時代になってきました。便利になることは悪いこととは思いません。しかしながら、便利さの中で失われていく人間の能力が何であるか、逆の言い方をすると、簡単な機械を工夫し、それを使いこなす中で育てられる能力は何なのか、このあたりの問題をきちんと整理する必要があると思います。便利さにひきずられての安易な機械化は問題です。教育研究をささえるものは、たゆまぬ実践活動から得られるデータの蓄積でしょう。これがなければ、どんな素晴らしい機器も無用の長物に化してしまいます。教育は人間相手の研究で限りなく奥の深い問題だと思います。

まだ経験も浅く、何事もこれからの私です。これまでの研究で探ってきた糸口を、少しずつでも教育研究の場で広げることができたらと思っております。どうか、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

新任のご挨拶 — 岐路 —

教育学部附属教育実践研究指導センター教授 屋敷平州

道には岐路が少なくない。多くの人々が行き交う雑踏のなかで、音もない停止したような人生の一つの十

字路が現われる。と、ある響が心の耳朶をとらえる。応答が始まる。新しい出会いを温めようとするかのよう、既知と未知とがわたくしの生のなかで対流する。道が変わって、先輩学兄諸氏によって拓かれた切り通しの、その断面の匂いにつつまれながら歩むわたくしの視野に巨大な山塊が浮び、教育実践とはなにかを厳しく問いつめる。ふと、〈左伝〉の「趾を挙ぐること高し。心固ならず。」の戒めを想う。

これが、6月以降における、わたくしの実感です。

そんなわたくしに、かつての同僚のひとりが問いを投げかけました。

「理論が実践に依存する関係を重視するのか。」

「実践が理論に依存する関係を重視するのか。」と。前者は、実践を成功させるにふさわしい理論と方法は実践の積み重ねを除いては生みだされないこと、その意味で、実践が理論に普遍性を与えるという関係を重視する考えのように思われました。後者は、効果的な

実践は正しい理論と方法の裏打ちを必要とするという考え方と受けとれました。

ところで、実践がなぜ成功したのかといえば、それは正しい理論と方法があったからでありましょう。しかし、その正しい理論と方法がどのようにして発展したのかといえば、結局、前者の關係に帰着することでしょう。実践と理論・理論と実践の依存關係の、こうした関連性は一種の正・反・合の關係といえるのでしょうか。わたくしは、正・反・合における実践、これが問題かも知れないとしか答えることができなかったのでした。

学内の並木も数少ない紅葉をとどめて、なお秋に燃えようとしています。その下を行き交う学生も、その青春を燃えあがらせようとしているように思われます。この空間のゆたかな内実。それに沈潜したいと思っています。

新任のあいさつ

経済学部助教授 高橋

はじめ
—

この9月に計量経済学担当教官として本学に赴任いたしました。1973年に東京を離れ、New York市にあるCOLUMBIA大学へ留学していらい、約10年ぶりに本格的に日本に帰ってきたわけです。その間

MICHIGAN大学(Ann ARBOR)とBOSTON大学(BOSTON)で数理統計及び確率論等を教えておりました。日本海側に住むのは始めてですが、これから冬に向かい、スキーを十分楽しもうと思っています。

新任のあいさつ

工学部助手 吉村敏章

6月1日に着任し早くも半年が過ぎようとしています。前の2年間は筑波大学化学系の文部技官でありましたが、筑波の研究技官は3年で辞めなければならない、その前の研究員2年、アメリカでの博士研究員2年、学生を修了してからの計6年間は身分の落ち着かないいわゆるオーバードクター同然でありました。化学の分野では全国にオーバードクターがひしめき合っており、研究職を志す者にとって激しい競争の社会である。よく人にこの世界で東大出を押退けて研究職につくためには人の何倍も仕事をしなければならないと言われたものだった。とにかく一生懸命に仕事をするしかない。幸いにも作道教授に拾っていただき、ようやく自分の仕事の間が与えられました。猶一層努力したいと考えております。担当は応用物理化学ですが実際の研究は物理化学的手段を用いた有機反応機構の解明です。

一見地味な仕事ですが、有機化学の分野では合成化学と同様に重要な分野の一つとなっております。近年有機化学の分野では合成化学が盛んになったが、一方ひところのような反応機構の研究は少なくなってきました。これは反応機構の研究があまりにも細かいところに立ち入り過ぎて、実際の有機合成などに役立つような基礎的な知識を提供しなくなったからだと思われる。ところが現実の有機反応は非常に広い範囲にわたって反応機構を解明すべき様々な問題が横たわっており、合成化学の立場からも基礎的なデータが望まれている。いままでと同様にこのような分野で引き続き研究できることになって非常に幸運だと思っています。

富山に来る前は冬は雪が多くて雪おろしが大変だといわれたり、工学部は古くてきたないといわれてきました。雪は別にして筑波大学のような新しい大学から

本学工学部のような木造の建物が残っている大学へ来てその差は想像以上のものがありました。この木造の建物は趣があつてなかなかいいと思う。特に渡り廊下が古風な感じでいい。このような落ち着いた雰囲気

の中で研究できることは私にとって喜ばしいことでマイペースで勉強ができそうです。まだいろんな点で未熟者でございますのでよろしくご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。

新天地 - 富山に寄せて

けがさわ
教養部助教授 氣賀澤 保規

5月1日付で着任してから10か月余り、初めての土地で右も左もわからないところから始まった生活にも、わずかながらも余裕がもてるようになってきました。それにともなって、この富山の雄大にして豊かな、だが冬には一転して豪雪におおわれる厳しさもあわせもつ風土のなかで、どのような歴史や文化が育まれてきたのか、そうした興味が頭をもたげてきております。

ところで、富山大学への赴任にあたって、私は、その落ち着いた環境のもとで気分を一新して研究に取り組める期待に胸をふくらませたのですが、実のところ、中国史を専攻してきたものとして、研究の条件に恵まれ

た京都の地を離れることに一抹の不安を抱かないわけにはいきませんでした。しかしながらこちらにやって来て、研究に教育に全力を傾注され、しかも人間的魅力に溢れるさまざまな分野の方がたの存在を知るにつれ、私のもった不安がまったく取るに足りない一人よがりのものであったことに気づかされました。今後、こうした真摯にして人間性豊かな先学を指標として、みずからの研究基盤の確立にむけて、一層の研鑽を積んでいきたいと決意を新たにしました次第です。富山における充実した生活は、そうしたなかで実現されるものと思っております。

ドイツ滞在記

さげ やま ひで お
人文学部教授 提山 淑郎

日本を発つ前から同僚や友人達からドイツに行ったら生水は飲まない方がいいと注意されてはいたが、向こうに着いて何が困ったと云って水断ちほど苦しいことはなかった。日本と違って空気がからって乾燥しているのは悪くないのだが、ドイツの住宅は石造りやコンクリート建てばかりだから冬はスチーム暖房をするせいか、口の中がからからになり水が欲しくなる。

生水が飲めないと云えばお茶を飲めばいいわけだが水の成分が悪いせいかお茶もおいしくない。それならいっそのこと冷たいビールでとなるのだが、やっぱり真水には敵わない。更に悪いことにはビールを飲むとあの方が近くなる。宿舎にいる時なら問題ないが街に出てレストランに行き、いい気持になりあれを忘れて寒空に出たら最後しまいなのだ。公衆のあれが殆んどいってない。勿論立ち何とかは厳禁なのだ。散々な目に遭った後、やっと見付けてホッとしても油断ならない。ドアには自動キーが取り付けられていて硬貨を入れないと用が足せない仕組みになっている。そうでないところは番人が頑張っていてすぐには飛び込めない。値段は10プフェニヒから30プフェニヒ位だった。その意味では日本は全くこの方面の天国であ

る。

チュービンゲンは人口7万余りで、このうち大学生は約2万いるとのこと3人に1人は学生であり、大学の教職員やその家族のことを考えると、この町が大学町といわれているのも首肯ける。絵葉書に大学町チュービンゲンと書いてあるのは愛嬌だが、公文書に押す市役所の公印まで大学町チュービンゲンとなっているには驚いた。つい5年前大学の500年祭を祝ったということだったが、別に大学でなくともこの町そのものが古いのだ。私が行きつけのレストランにしても4・500年は経っているもので日本ならとくに重文扱いになっているしろものだ。チュービンゲンはネッカー河畔に寄り添っている石畳と坂の旧市街と丘に向かって広がる新開地からなっていて、人口は少ないが面積でいうなら、ゆうに富山市位はありそうだ。チュービンゲン大学は神学部を初めとする15学部からなる総合大学で、私が通ったのは哲学部と新言語学部だったが、哲学部は昔からの建物で、木造の隙間のある階段をギシギシいわせて登って行くときなぞタイムトンネルを通過して一昔前の世界に足を踏み入れたような気がし

た。一方新言語学部は新しいコンクリート建てのもので、廊下はグレイの絨毯が敷きつめられているモダンなものだった。関係の先生方には私の専門分野についていろいろお世話になったことは言うまでもないが、更に家に招待されたりあるいはレストランのお伴をしたり、時には泊めて頂いたりして楽しく時を過ごすことができたことは本当に幸せだった。だからチュービンゲンのことは町の古さもさることながら私を暖かく迎えて下さった先生方のことを抜きにしては語れないのである。

ドイツの町はどこへ行っても整然としていて、美しい木組と切妻の屋根が青空に幾何学的に建ち並ぶ。日本のように電柱がない、けばけばしい広告、看板、イルミネーションがない。とにかくすっきりしている。またドイツの夜が印象的だった。招ばれていったどの家も明りを暗くしていて、例えば天井の高い二十畳はあろうかと思われる部屋に、蝶の羽根を抜けたような笠に収まっている電球はぼんやりと辺りを照らしているだけで、老眼の私はこれには全く閉口した。ついてきた電灯をわざわざ消して蝋燭の明りだけで譜面を見ながらピアノを弾いてくれたりしたことがあったが、これなどは神業に近い。いずれにせよドイツ人は蛍光灯のような明るい照明はお嫌いのようだった。

ところでドイツ人が好きなものは車と犬である。国内に張り巡らされているアウトバーンはこの車好きに恰好の材料を与えたことになった。エネルギー節約の声もものかわ時速150キロメートル位の猛スピードで走る。1年間に12,000人ほど交通事故で亡くなるとい

うのも痛ましいが、このような機械好きのエネルギーを他に転じさせる方法はないのだろうか。またドイツ人は犬好きでよく連れて歩く。バスに乗せてもいいようだ。犬はよく躡られていて番犬は別として吠えたり人を噛んだりしない。ただ飼主の方が問題であの方の始末をしないから、朝の散歩をするなら上を向いて歩かない方がいい。洗濯が大好きで清潔好きの彼らにしてはこの辺りが理解できない。

私は休日などを利用してよく近郊の町や村に出かけたが、どこへ行ってもあるのが石造りの井戸（又は噴水）と教会である。小さな村なら可愛いものが造られていてその風景はのどかなものだった。またケルンやウルムのゴシックの大聖堂となると、中に入れば冷んやりとして薄暗く巨大なドームの空間に、ステンドグラスの鮮やかな聖者たちの姿が浮かび上がり、キリスト教徒ならずとも何だか心が洗われたような気持になった。これも天に向かってそそり立つ大聖堂のなせるわざであろうが、お詣りしていたのはおじいさんおばあさんが多く、若者の宗教離れは洋の東西を問わず同じようだった。

最後にもう一つ触れておきたいのは、ドイツの東西問題だ。第二次大戦とそれに続く東西両陣営の冷戦の結果とはいえ、同一民族でありながら二国家に分かれている現状が固定化しつつあることは、本当に心の傷む話である。ふとした拍子に話がこのことに及ぶとき彼らが見せる諦めというか深い悲しみの表情に全く私は言葉もなかった。一日も早い東西ドイツの平和な統一を心から願って私はドイツを後にした。



JAPANESE AS INDUSTRIOUS PEOPLE

(a part of my diary)

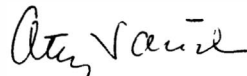
Before I came to Japan, I met one of my old friends at about 9 o'clock p.m near a bus station. Seeing that he was wearing a uniform-look dress I tried to make a joke by telling him to change his clothes before going out at night. To my surprise he told me that he was just on the way home from work. Then I asked him what type of human can force him to spend the whole life in working. And he said; "you know I'm working in a Japanese company". At that time I tried to understand with an excuse that Japanese work hard because they were not in their own country. But, as soon as I touched my foot in Narita airport I began to realize that working hard is not only their habits but also their characters. Day by day I witness how a 66 year old man worked from 8 o'clock in the morning until 6 o'clock in the afternoon (he lived in somewhere 40km away from his office), or an elementary school boy who went to a formal class in the mornings and took other extra curricular activities in the afternoons.

Also, in Toyama University where I stayed for about 7 months for An Exchange of Academic Information Program between Toyama University and IKIP Muhammadiyah Jakarta, I was really impressed with work-oriented people in which beurocracy is almost unseen. In the first month I almost didn't believe in what I had got in my hand after I was called by the Dean of the faculty for an approval of my presence and activities in doing research in that university. What I want to say is that I didn't find either stamp or signature on the letter of approval. So I waited for another letter but there was never another one. It seemed to me that there is such a strong confidence among the people so that it appeared in a form of speedy flow of work.

Another thing to ponder is "discipline" which can be seen in almost every place. Perhaps it will take me a long time to study how the Japanese have successfully mingled the discipline with high spirit of working. But the only thing I know is that they work as they have to. I've seen many professors who spend the whole working time obediently in the laboratories eventhough they seemed to have privileges to come and leave whenever they wish (of course there is a regulation in "stamping" the daily attendance list, but so far as I know some of them did it at one time by the end of the Month). Here I can see that most of them like their job very much and it seems to me that they feel like at home in their laboratories rather than in their own home.

Some expressions that are commonly heard in many places and very impressive to me are; Shigoto desukara shikata ga arimasen, Gambatte kudasai, Gokurosama deshita". To all my friends, the Japanese, I just want to say; "Be happy with your work". Your friendliness and high spirit of life is somewhat attract me to come back again someday.

Toyama, November 1. 1982.



Atiq Susilo

MY IMPRESSION ON THE STUDENT CAMPING TRIP *
OF THE FACULTY OF EDUCATION TOYAMA UNIVERSITY

Faridal Arkam


At first I thought that this camping trip was not more than just a regular activity. But after participating in every activity I began to realize that there were a lot of things can be considered as useful. At least as a foreigner with different background I could see many things interesting by means of comparative study.

Some examples of those interesting activities like how the leader of my group (Michimae-san)**came and explained everything I should do during the program such as what equipment should be taken and also food contribution. Besides, she also explained to me about the activities written on the guide book of the camping study such as talent guidance cooking, making sketches, mountain climbing, hiking, eating together, etc..

I believe that this kind of activity is very good especially for the ones who will become teachers. It has two important elements namely recreative and educative. What I mean with recreative here is that it can refresh us physically and mentally, by visiting beautiful sceneries, by being happy with friends, by doing light discussions, and by being relaxed. Meanwhile from the educational view, during those activities each personal character can clearly be seen. For example, who has a leadership, reliable, sense of responsibility, tolerant, etc..

And the most interesting thing to me is how they organized their activities so skillfully that there didn't seem to be a kind of overlapping between the leader and the followers. And beside that I am of the opinion that those students seemed to love their beautiful nature. As I saw that there was nothing left in chaos as soon as they deserted the place.

I am sure that such kind of habit must have been built from early childhood. So I'm very satisfactory with this.


(Faridal Arkam)

- * 教育学部で9月7・8・9日に行なった3年次学生を対象とする合宿研修のこと。
今年度は、有峰青少年の家ならびに同付属キャンプで実施された。
- ** 道前郁美——教育学部小学校教員養成課程3年次学生(数学)。

Atiq Susilo 氏 (1950生) • Faridal Arkam 氏 (1952生)

インドネシア共和国、ムハマディア教育大学(ジャカルタ)助講師。同大学と富山大学との学術情報交流プログラムに従う最初の研究員。本年6月から11月まで、教育学部において教育ならびに教員養成問題について研究・研修をおこない、学術交流のみならず友好関係の増進に寄与された。

私の西ドイツ留学

教育学部小学校教員養成課程（教育心理学） 東山弘幸

私は、昭和56年10月から翌年7月までの間、富山大学教育学部からの第8番目の学生として、西ドイツへ留学する機会を得た。場所は、西南ドイツのロイトリンゲンという町にある教育大学であった。私は、この西ドイツの小都市で10ヶ月間ひとりで生活したわけであるが、私にとってその10ヶ月間は、決して忘れられない期間となった。この西ドイツでの体験の中でも、特に強く私の印象に残っている出来事について、いくつか述べたいと思う。

私は、ロイトリンゲン教育大学で、教育心理学と地理学を二学期間勉強することができた。その大学の女子学生たちは、冬になると編み物をしながら講義を聞き、演習に参加した。また、大学構内にカフェテリアがあり、そこではビールも売っており、昼間から大学内でビールを飲む学生もいた。しかし講義にはしっかり参加し、私が曜日を勘違いして欠席した時には、「どうして欠席したのか？」と尋ねられた。

どこの町にも多くの外国人が住んでいるらしく、市役所には外国人のための窓口が設けられており、新聞スタンドでは、外国の雑誌類も売っていた。人々が外国人に慣れているから、あきらかに異人種の私に対して「病院はどこにあるのか？」「ペスタロッツ通りはどこか？」などと道を尋ねる人たちによく出くわした。

町の広場では、火・木・土の週3回、市が開かれたが、その品物の中心は、野菜・果物・パンなどの食料品と草花であった。そのため広場は、足の踏み場もないほどゴミでいっぱいになるのだが、市が終わると清掃車がやってきて、ゴミを取り除き、路面をピカピカに磨いてしまう。その変化の激しさには、まさに目を見はるばかりであった。また、町中でコーラを買おうとした時、店のおばさんに「もう店はおしまいだよ！この看板が見えないのか？」と、怒鳴られてしまい、意気消沈してしまったことも忘れられない。

私は、幸いにもベルリンを訪れる機会を得た。共産圏の一部、東ベルリンにも行ったが、国境の入国検査は、西ドイツと比較にならないほどきびしく、カバンの中身を全部出させられた。（私は、西ドイツから帰国する時、フランクフルト国際空港の出国検査ではパスポートの中も見せずに素通りした。）

私の印象に残っている事をいくつか述べたが、他にもさまざまな出来事があった。そして、それらの事柄は、今も私の中で息づいている。私は、この西ドイツで見た事、聞いた事、学んだ事を、今後の人生に役立ててゆきたいと思う。

昭和57年度教員養成課程合宿研修を終えて

実行委員長 定村 誠

我が教育学部第3年次学生は、富山県有峰青少年の家において、去る9月7日から9日までの3日間、合宿研修を実施しました。目的は、教育と学習の充実、集団的な教育的諸活動の指導力の育成、共同生活による相互啓発と連帯感の育成、及び豊かな人間性の形成に寄与し、資質のすぐれた教員の養成の4点です。参加人数は、学生207名、インドネシアからの研究生2名、教職員13名、計222名で、幸い好天に恵まれ、内容の充実した有意義な研修であったと思います。活動内容は次の通りでした。

初日。午前8時。野外炊飯の材料や用具、防寒具等

でふくらんだリュックサックを背負って教育学部前に集合。ほぼ定刻にバス8台で有峰へ。途中、道のひどいに閉口したものの、それだけに有峰湖が見えた時の感激は忘れることのできないものでした。有峰キャンプ地へバスで直行し、入所式、オリエンテーションの後テント設営の実地訓練、そして野外炊飯。楽しい夕食後、暗やみの中、湖畔や白樺の林の中での討論会。少々寒かったものの議論に熱が入りました。テーマは「これからの教育」。内容は例年の教育実習の反省会的なものではなく、むしろ第3年次学生として実習を前に、子どもが望む教師像とか、非行問題、あるいは

体罰などについて話し合いました。テントで寝たその夜は冷え込みが厳しく、寒さはひとしおでした！

2日目。朝食を済ませ、テントを撤収した後、青少年の家までの6kmの湖畔の道を先頭者50分、最終者で1時間15分で全員完歩し、若者らしさを発揮しました。午後からは、選択班活動として、自然観察、ソフトボール、工作等に分かれ、グループ内の親睦を深めました。2日目のハイライトは夜のキャンプファイヤーです。直前のにわか雨にもかかわらず、有峰の澄んだ夜の空気にあかあかと燃え上がる炎を囲んで、歌に、ゲームに、フォークダンスに、教官も学生も普段では見られない素顔を見せて、大いに楽しいひとときを過ごしました。その夜はなかなか寝つけなかった人もいたほど感動と思い出に満ちたものとなりました。

初日、2日目と晴天に恵まれましたが、3日目はあいにくの雨。しかしこの雨の中、皆疲れも見せずにオリエンテーリングに挑みました。汗と泥にまみれ、びしょぬれになりながらもチームワークで頑張りました。午後からの反省会では、この3日間を振り返り、分科会形式で各研修の反省を行いました。反省点も数多く出されましたが、皆の顔には、それぞれに自分の責任

を果たし、過密スケジュールをこなしたという充実感がありました。こうして予想以上の成果をあげて、各自それぞれの想いを胸に合宿を終えました。

今回の合宿研修の特徴として次の2点が挙げられます。一つは、教育実習前に実施したということ、また教育学部の3年生のほぼ全員が、1箇所の研修地で研修したということです。普段会う機会の少ない者同志が交流し、全員が等しい体験をしたという連帯感が生まれたことはすばらしいことだと思います。もう一つは、今年の5月から滞在しているインドネシアからの研究生、アティックさんやファリダルさんとも友好を深めたことです。これは忘れることのできないすばらしい触れ合いだったと思います。

学生が主体となって組織作り、企画、運営を行い、参加した全員が何らかの役割を担って、それを責任もって完遂した研修中の集団活動は意義あることだと思いますし、秩序ある立派なものであったと自負できます。最後に、御援助、御協力してくださった教官職員の方々に御礼を申し上げたいと思います。そして、今後の勉学と将来の教師生活に生かせる体験を持てたことを感謝しています。

教育実習について

教育学部附属小学校教育実習部

附属学校設置の大きな目的の一つである教育実習を学部の計画に基づき、今年も9月6日から10月16日までの約1か月半にわたって実施した。

この教育実習は3年次と4年次の2か年間で各2単位計4単位実施することになっており、3年次では基本実習・4年次では応用実習という形で、小学校教員となるための各教科・道徳の学習指導の実際から学級経営・特別活動の指導にいたるまでの実務経験を通して、児童を指導するために必要な専門的知識・技能を習得し、教職志願者としての自覚と意欲を高めさせるものである。

そこで、今年度実施の概要を記すと、前期（9月6日から9月25日）は4年次小学校教員養成課程の学生（131名）を対象に本校（66名）と協力校（65名）でそれぞれ行った。前年度の基本実習で身につけたことの上に、更に応用実習ということで、実地授業に主眼をおきながら、校内陸上記録会の運営参加や低中高学年集会の企画運営等の経験を通して実習の効果

を挙げた。22日と24日の両日にわたっては、教育実習の総仕上げとも言うべき公開授業（県教委・教育機関・学部教官等多数参観）を実施した。実習生はそれぞれが指導細案をもって授業に臨み、午後の協議会において、お互いの学習指導の在り方を話し合い研究を深めた。

後期（9月28日から10月16日）は、3年次小学校課程（144名）養護課程一類（18名）必修の学生と4年次幼稚園課程（23名）中学校課程（33名）選択の学生の計218名を対象に本校（90名）と協力校（128名）で行った。6月下旬から7月上旬にかけての観察参加に続いての実習であるので比較的スムーズに実習に入ることができたようである。

実習内容は実地授業に取り組むまでの教材研究の在り方について、各教科主任の講話や指導授業を観察させるなど十分に理解させて、基本実習の実効が挙がるように計画して実施された。

中学校教育実習の現状とその問題点

教育学部附属中学校教育実習部

教育実習は、教生諸君が大学において修得した理論を初めて教育の現場において実証し、体験するものであって、教育者としての自己の適性を発見し、練磨するためのまたとない重要な機会である。教生諸君は教育実習を通して初めて、まことの教育精神にめざめるとともに、いかに自己の知識が不確実であり、自己の技能が未熟であり、生徒の理解が不十分であるかがしみじみとわかるのである。

今年の附属中学校での教育実習は9月6日から10月6日まで4年次が15.5日間、3年次が7.5日間それぞれ行われた。教育実習を3年次と4年次に分けて実施する利点は、3年次の実習の成果を4年次に生かすことができる点である。3年次で初めて教壇に立ち、教育の難しさと自分の力の足りなさを自覚する。そして、各自来年への課題を持ち1年間じっくりと研究することができる。そのため例年4年次は3年次に比べ教材研究・学習指導・生徒への接し方など大きく進歩

しており、4年次の実習を効果的に行うことができる。

教生諸君が教育実習でまず戸惑うのは授業の進め方である。本校では、効果的な学習指導の方法について、ここ数年来、生徒自からの主体性を高め、学習の仕方が生徒の身につくような指導の方法はいかにあるべきかについて、研究と実践を進めてきている。しかし、ほとんどの教生諸君は、高校・大学と講義を中心とした授業を受けてきたために、なかなか教師中心の授業から脱却することができない。学生自身が、もっと学習指導の方法について研究を進めるとともに、自分で課題を見つけ、追究、解決する学習をより多く体験することが必要だと思われる。また最近、実習に適応できない教生諸君も少数ではあるが目立ってきた。生徒の前で話ができなかったり、極度に自信を失ってノイローゼ気味になったりする者もいる。学部・附属校の十分な連携の上に取り組みなくてはならない新しい重要な課題のひとつと言えよう。

附属養護学校教育実習

教育学部附属養護学校教育実習部

昭和42年4月富山大学教育学部に養護学校教員養成課程が新設されたことから、その翌年教育実習の場として附属小学校に特殊学級が1学級設置され、さらに昭和45年4月から附属中学校に特殊学級が設けられ、養護学校教員養成課程の対応策が講ぜられた。このようにして、精神薄弱教育の研究と教育実習の場としての使命を果すことになった。しかし、精神薄弱教育という立場より考えれば、その責任を十分に果たすことはむずかしい。教育目標や方針を明確に自立、精神薄弱教育にふさわしい学校教育や学校運営ができ小学部・中学部・高等部の一貫した教育を行うことで初めて、その責務が果されると考え、養護学校への昇格を待ち望んだ。それが実現されたのは51年4月である。

教育実習も養護学校独立と共に年々内容的に充実され、教生諸君の期待にそうものとなった。昭和56年

度から4単位認定校になり、本年度は、9月6日から27日まで前期、9月28日から10月16日まで後期、計30日間の教育実習を終了した。小学部9名、中学部7名、高等部9名の計25名で、全員が女性という本校教育実習始まって以来のことであった。

養護学校での教育は、児童生徒を特別な人間に仕立てようというのではなく、一人ひとりが持っている能力を可能な限りのばし、調和のとれた人格をつくり、健全な社会生活を営むことができるように仕向けていくことである。30日間の本校での教育実習を終えての教生諸君の感想には、初めて養護学校教育を経験してのとまどいを感じられる。いわく、「能力差の大きい生徒を一人ひとり指導していくことの難しさを感じた。」「障害児教育には、普通学級で40数名を相手にしているときつい忘れがちな教育の原点がある。」「教えることがいかに時間と手間のかかるものか思い

知らされた。」・「校内実習や職場実習を通して彼らが社会自立をめざして一生懸命働いている姿を見て胸を打たれた。」等々。これらの感想は、養護学校教育実習での貴重な経験を生かして今後の障害児教育にか

ける彼らの決意のことばとも読みとれる。この体験を生かして、良き障害児の理解者として教育にたずさわってほしいと願います。

教育実習について

教育学部附属幼稚園教育実習部

2学期早々に始まる教育実習は、長い夏休みを終えて集団生活にもどってくる幼児や、それを迎える担任に多少不安を抱かせる。が、互いのとまどいときこちなさの中で、素早い適応をみせ実習生を歓迎するのは幼児たちである。

教生先生は、どんなことにもやさしく応じてくださる、一緒に元気に遊んでもらえるなどは、幼児たちにとって何よりもうれしいことである。歓迎の気持ちを体一杯に表した幼児の言動は、学生達の不安を消して実習への楽しい期待と意気をもりあげてくれる。

今年度の教育実習は、4年次30名が9/6(月)から9/25(土)、3年次30名が9/28(火)から10/16(土)にわたって行われた。本園は5学級なので、残念ながら30名全員を同時に受け入れるには無理がある。それで、各々半数を協力園にお願いし、2ケ年で一度は本園で実習が行えるようにしている。

教育実習は、学生たちが実際に教育活動の場で幼児と直接触れたりかかわったりすることを通して、幼稚

園教師として必要な基本的なことをしっかり持つことを目指している。実習期間が短いので、このような目標の十分な達成はむずかしいが、現状において教育実習の効果をあげるには、どのようにしたらよいかを受け入れ側の重要な課題であり、そのために努力している。

3年次は、幼児との実際的触れあいがはじめてであるので、まず幼児をよく観察しその特性をつかむこと、担任の指導を観察して保育の意図や指導方法等について理解を深めること、部分保育を担当し、教育理論に基づく指導計画の立案→実際指導→反省評価を通して幼児と保育について考えを深めることなどを重視する。

4年次では、あらかじめ自己課題をもって実習に臨む者が多い。幼児の観察・望ましい活動や環境・指導法等について、多面的な考察と反省が行われる。毎日の実習の反省協議に熱が入り、翌日の指導計画立案に苦慮して帰宅が大変おそくなることが多い。

お別れ会の日、幼児と学生が心底から名残りを惜しむ姿がみられ、私共の心を温かく満たしてくれた。

学 部 だ よ り

◆ 教育学部だより

附属教育実践研究指導センター(CRTTE)*の創設に当って

センター長事務取扱 大 沢 欽 治 (教育学部長)

教育学部かねての宿願として要望していた上記〈実践センター〉が、昭和57年度の概算要求で通り、創設の運びになり、鉦音高く建設されつつありますので、センターの概略を皆様にお知らせいたします。

I 目的と業務内容

今更申すまでもないことではありますが、教育学部は

有為な教師を養成することが大きな使命であります。従いまして、そのためには各教科の専門的研究と教育実践とのバランスのとれたカリキュラムが立案されることが望ましいこととなります。学部といたしましては、これらの教師教育の改善研究をさらに強化するための中核的機能を果し、学部と附属学校園の共同利用

研究の施設として創設されたものであります。〈センター規則〉の第2条には、目的として、「教育実践に関する理論的・実践的研究及び指導を行うこと」とうたわれています。そしてこの目的を達成するための業務内容は次のように掲げられています。

- ①教育実習の改善に関する研究及び実践指導並びに訓練プログラムの開発に関すること。
- ②授業に関する実験的研究及びその指導に関すること。
- ③教材・教具の開発研究及びその指導に関すること。
- ④教師教育改善のための基礎的・実証的研究に関すること。
- ⑤資料の収集及び整備に関すること。
- ⑥紀要の刊行など研究成果の発表に関すること。

⑦その他センターの目的達成に必要な事項。となっています。これらの目的も一朝一夕に、しかも総花的に達成出来るものではありません。できるだけ堅実にしかもこれら業務内容の焦点化をはかり、一步一步積み重ねていくことを希望してやみません。

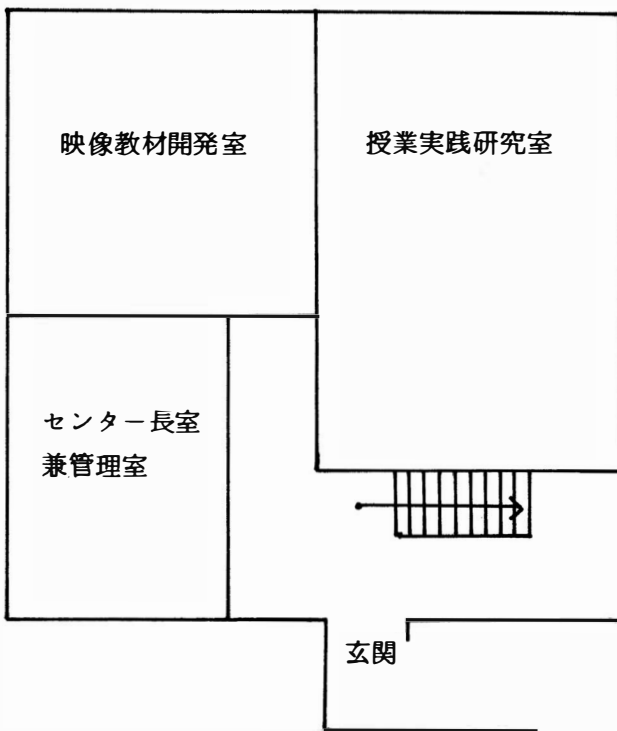
II 組織

教授 1名
 助教授 1名
 運営委員 学部 3名 附属校園 4名
 研究員 若干名

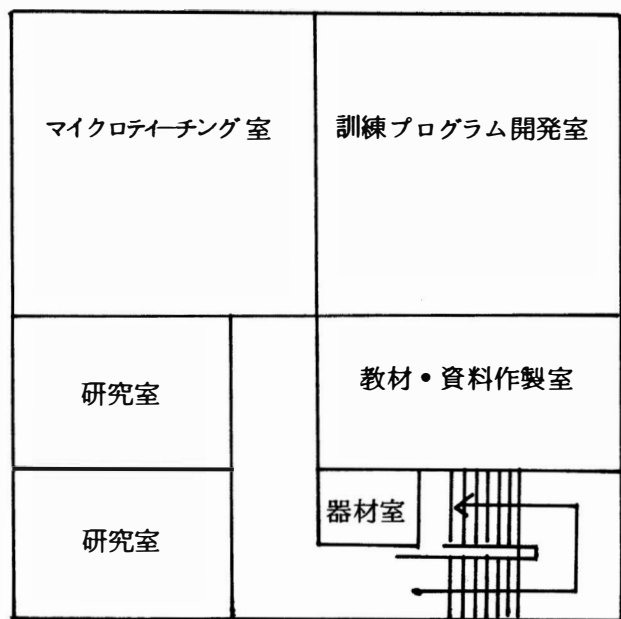
III 施設

- 建設位置 教育学部 第2棟（自然科学棟）の西側
- 建物面積 530㎡ 2階建

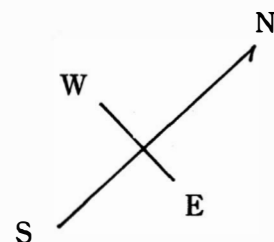
• 平面略図



1階平面略図

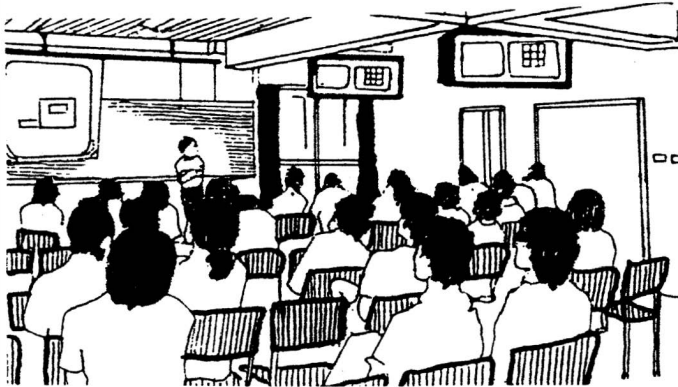


2階平面略図



• 各研究室の主たる機能

授業実践研究室



TV・ビデオプロジェクター等の視聴機器並びに授業分析機器の導入による授業の実践研究を行う。

映像教材開発室

授業実践の記録及びその編集と授業研究のためのビデオ教材等の開発を行う。

マイクロティーチング室



小グループで授業の実践研究を行う。

訓練プログラム開発室



情報処理システムを使っての教材資料の管理、検索並びに授業研究を行う。

教材資料作製室

広く授業研究に必要な教材資料の収集整備並びに各種教材の開発、作製を行う。

IV センターの全国及び北陸ブロックの現況

現在、31大学にこの種センターが設置され、「国立大学教育工学センター協議会」を組織しており、先月第21回協議会を開催、研究発表が行われました。また、北陸ブロック組織として、富山、金沢、福井大学教育学部附属センターが教育方法改善についての共同研究を進めております。

V 結 び

本学部附属センターが、学部並びに附属学校等関係者の討議、研究、情報の広場として、教育を支える魂を根底に据えながら、諸科学並びに技術の成果を総合し、着実な前進を図るよう期待している次第です。

* Center for Research and Training in Teacher Education の略。

◆ 人文学部だより

○昭和 57 年度公開講座行われる。

昨年度にひき続き、本年も 9 月 27 日から 10 月 5 日まで、下記の課題・講師で開講された。メインテー
〈講座内容〉

マは「文化における東と西」。受講生は 48 名。全講義修了者は 30 名。

月 日	曜	課 題	専 攻	講 師
9月27日 28日	月 火	古代オリエント文明の発見	比較文化	松島 英子
29日 30日	水 木	ガンダーラ美術の発掘	東 洋 史	小谷 仲男
10月 1日	金	西から見た東 - 18世紀のあるフランス人の描いた東方像 -	比較文学	村井 文夫
4日 5日	月 火	ローマ道と日本古代の道	人文地理	木下 良
6日 7日	水 木	「西遊記」と東アジア文化圏の国々	中国文学	磯部 彰
8日 9日	金 土	南蛮文化と日本文化 - 生活文化にみる -	比較文化	横井 清

〜〜 保健管理センターだより 〜

☑ 生活のリズムについて

みなさんは、1日 24 時間をどのように過ごしていますか。人間は誰れでも 1日 24 時間という時間を生きています。勿論、職業や年齢によって、24 時間の配分の仕方は異なりますが、大体、働く（学校生活）8 時間、睡眠の 8 時間、そして雑事の 8 時間という生活習慣になっています。

学生相談を行いながら最近思うことは、働く（学校生活）8 時間と雑事の 8 時間が複雑に入り組んで、8 時間ずつの 3 等分にならないので、3 拍子にならず、生活のリズムが整っていないようです。

それが現代社会の特長であるのかも知れませんが、何んだか生活のリズムの乱れている人が多くなっているように思われます。

例えば、1 限目の授業によく遅刻をする。中には遅刻の常習犯もいるとか、1 限目から欠伸をするもの、居眠りをする学生。また、朝の洗顔も、歯みがきもせず、朝食抜きの学生が多いということです。

それは夜更かし、遅寝、遅起きの生活をしているか

らではないでしょうか。夜更かしや遅寝は、日常生活リズムを乱す要因の一つと考えられます。

例えば、
・自律起床をしなくなる
・朝食の摂取をしなくなる
・排便などの規則性が損われる
・周囲の人びとに、心理的に依存するようになる
・集中力を欠き、無気力な状態を維持していく
・情操は、不安定になり、協調心に欠ける
など自分で自分の生活リズムをコントロールできなくなり、受動的な生活習慣が身につけてしまうのです。

来談する学生の中には、休講の短時間でありながらその時間をどう過ごせばよいかわからない、ましてや、専門へ移行できず留年した学生が、授業以外の時間（自由時間）の使い方がわからず、時間を持って余して悩み、また雑事の 8 時間の利用、配分に工夫が足りないため、有効に使うことができず、健康を害している学生もいるようです。

私たちは、雑事の 8 時間を身のまわりのことをはじめ、読書やクラブ、アルバイト、趣味などに有効に、

リズムカルに利用することによって、健康な心身を維持増進することができるのではないのでしょうか。

昨年（56年度）学生の生活意識調査を実施し、生活時間と課外活動の関係についてみますと、次表のような結果ができました。

＜クラブ加入者と生活時間＞

項 目	時 間	大 学	
		加入	未加入
1 睡 眠 時 間	7.0~8.0	62	60
2 講 義・演 習 実 験 など	3.0~5.0	40	30
	6.0~8.0	53	54
3 図 書 館・研 究 室 自 宅 での 勉 強 時 間	0.5~2.0	77	68
	2.5~4.0	21	32
4 課 外 活 動	0.5~1.0	47	91
	1.5~2.0	33	3
	2.5~3.0	16	4
5 教 養・交 際 趣 味・娯 楽 など	0.5~2.0	68	65
	2.5~4.0	25	31
6 通 学 時 間	0.5~1.0	69	60
	1.5~2.0	19	28
7 テレビ・ラジオ視聴時間	0.5~3.0	91	91
8 アルバイト	1.0~2.0	82	90
	3.0~4.0	12	9

∴富山大学生（220名）

学期中の週日における1日の生活時間（平均時間）を課外活動の加入組と未加入組（途中で止めたものも含む）で比較してみたところ、加入組は、項目4の課外活動にかかる時間が多いのは当然であるが、項目2の講義、実験、項目3の勉強時間が多いことがわかった。また項目8のアルバイトについても94%の学生が1～4時間働いている。

課外活動に加入している学生は、割に1日の生活時間を無駄なく有効に使っていることになる。

＊ 診療室より

56年度の診療室利用状況は、別表の通りです。風邪による治療者は55年度の910件に対して1,311件と増え1位を占めています。

今年度は、乗り物（バイク、オートバイ、自転車、自動車）によるケガの治療者が目立ち、55年度は46件、56年度は69件と増え、57年4月～9月までの半年間に87件と年々増えています。（この件数は、治療室を利用した人の件数であって、直接、病院や医院へ行った人、軽傷で自分で手当をしている人の数は含まれていません）乗り物による事故をなくするには、乗り物をよく点検し、自分自身の体調を整え、十分に注意

することが大切かと思えます。

また、胃腸疾患による治療者数をみると利用者数の10.3%を占め、月別に分析してみますと、4.5.6月、12月そして2月と丁度、それぞれ所属の新入生歓迎コンパ、大学祭、忘年会、追出しコンパなどの行われる月と一致しています。お互に暴飲暴食に気をつけ、＼＼ほどほど＼＼を心がけてほしいと思います。

休養室の利用者も年々増えています。高熱や腹痛など体調を崩した時、蓄積疲労など大いに利用して下さって結構ですが、体調を崩さぬようお互に規則正しい生活リズムにのった生活こそ、健康の維持増進への第1条件ではないのでしょうか。

＊ 公開講座

昨年度に引き続き今年度も9月3日から9月24日まで＼＼こころとからだ＼＼というメインテーマで、下記の講師、講座内容で行われました。

今回は、特に柳田友道学長はじめ学部の諸先生方に貴重な時間をさいて頂き、講座に参加して下さいましたことを深く感謝いたしております。

月日	曜	題 目	講 師
9月 3日	金	人と微生物	柳田 友道
9月 7日	火	放射線と生命	道端 齋
9月10日	金	精神医学的にみた心身の相関	中村 剛
9月14日	火	生活のリズム	高尾テルノ
9月17日	金	運動・スポーツを教育する意味とその内容	山下 三郎
9月21日	火	成人病から老年病へ	浅井 亨
9月24日	金	運動療法	北村 深和

＊ 健康増進合宿セミナー

第3回健康増進合宿セミナー（友と何でも語ろう）を計画いたしております。文部省からの予算が付きしだい、期日、場所、経費、日程等を掲示しますので、関心のある方は是非参加してください。

カウンセラー 高尾テルノ



昭和56年度保健管理センター利用状況調べ

別表

(1) 診療室利用者数

病種	男 子 学 生						女 子 学 生						合計		
	文理	人文	教育	経済	理	工	教養(計)	文理	人文	教育	経済	理		工	教養(計)
かぜ	2	103	34	266	170	274	297	0	22	51	5	29	0	58	1,311
胃腸の疾患	2	21	13	91	55	79	135	0	13	34	2	16	0	47	508
貧血	0	2	0	2	2	1	2	0	2	2	0	2	2	5	22
打撲・捻挫 打撲・捻挫	0	29	20	90	59	66	254	0	14	75	0	23	0	60	690
切り傷・刺し傷 擦過傷	2	50	15	82	93	224	326	0	19	57	2	18	0	98	986
やけど	2	0	0	15	11	21	23	0	2	16	0	5	0	6	101
皮膚の疾患	0	20	3	49	27	21	55	0	7	10	1	16	0	17	226
眼の疾患	1	11	3	26	25	32	30	0	7	13	1	15	0	32	196
耳鼻の疾患	0	3	1	6	8	4	9	0	1	1	0	1	0	3	37
歯・口腔の疾患	0	45	10	69	55	30	81	0	9	20	1	12	0	16	348
その他	0	14	4	55	19	11	78	0	13	35	5	12	2	39	287
(健康相談)	0	17	2	33	18	3	35	0	5	19	2	3	0	19	156
(休養)	0	2	1	4	0	6	11	0	4	10	0	2	2	19	61
検査	0	4	11	36	24	90	28	0	5	16	0	6	1	19	240
検査	0	4	1	12	5	29	6	0	3	4	0	2	0	6	72
合計	9	325	118	836	571	891	1,370	0	126	363	19	162	7	444	5,241

在籍学生数 5,002名(男 3,619名 女 1,383名)

(2) 学生相談関係来談者数

	相談件数	相談延人数
修学上に関するもの	33件	96人
精神衛生に関するもの	36	143
栄養相談	100	115
その他	46	57
合計	215	411

(注) その他=医学相談, 課外活動関係, 書籍
解約相談など。

☑セルフ・メディケーションのすゝめ

『セルフ・メディケーション』とは1980年代の新しい医療用語で大まかに言って『自己医療をする』という意味のことばです。

自分の健康は自分で管理して治療する新しい時代がやってきました。なぜ『自己医療』が大切かについて少し述べてみましょう。

日本も今や世界に誇る高齢化社会と相なり、健康で長生きができることを喜べるようになった反面、医療費が増加し、私たちの健康保険料が膨大になるばかりでなく、深くほりさげて考えれば、健康保険制度の崩壊にもつながるおそれさえうかがわれます。例えば1978年にイタリアの健康保険制度が崩壊して、先進各国に大きなショックを与えた事実は、皆さんもご存

じだと思えます。そこで今叫ばれている『セルフ・メディケーション』のすゝめが如何に重要なことであるかを、皆さんと考えてみたいと思います。少くとも年に1~2回は必ず、特にX線、検尿、血圧測定などを含めた健康診断を受け、自分なりの健康手帳を作るなどして、体の状態をチェックすることを心がけていれば、自分の健康に自信を持つ事ができ、さらに近年増加の傾向をたどっている成人病の予防と共に、今一番問題になっている医療費抑制にも役立ち毎日快適な生活が送れるようになると思われます。さらにもしも自己管理出来なくなった時にはチェックした自分なりの健康手帳を医師に提示することにより治療上非常に参考になります。皆さん1日1回でもよいかから自分に合わせて、適当な健康法を考えて下さい。始めは、身近なことから実行に入ったほうがよいと思われます。例えば1本の節煙、節酒、軽い体操、減塩、生野菜をなるべく多く食べ栄養のバランスをとる。そして疲労をためないことです。一番よいと思われる健康法は1週間に1回は充分なる睡眠と休息を取ることです。また入浴時に手、足の裏をよく指圧したり、テレビを見ている間に耳全体を30秒~1分間もむくことも良い方法なのです。非常に簡単で誰にでも出来ますから続けてやって下さい。血行が良くなり、疲れがほぐれ壮快な気分になり心にゆとりが出来ると思われれます。特に耳の指圧は高血圧、しもやけ、ボケの予防にもなると言われています。

明日といわず今日から積極的に「セルフ・メディケーション」を1日でも早く実行して、健康な体の基礎を作り、心身ともに健やかな生活を推進できるよう心がけましょう。

保健管理センター 中村 良子



学生部だより

第34回北陸地区国立大学体育大会 団体成績一覧表

種目	優勝杯	1位	2位	3位	4位	5位		
男	陸上競技	金沢大学長杯	金沢	富山	福井	富医	福医	
	野球	富山大学長杯	金沢	福井	富山			
	庭球	富山県体育協会長杯	金沢	富山	富医	福井	福医	
	軟式庭球	石川県知事杯	金沢	富山	福井	富医	福医	
	卓球	金沢市長杯	福井	富山	金沢	富医	福医	
	バドミントン	福井市長杯	福井	金沢	富山	富医	福医	
	バレーボール	福井県知事杯	金沢	富山	富医	福井	福医	
	サッカー	石川県知事杯	富山	福井	富医	金沢		
	ラグビー・フットボール	富山県知事杯	金沢	富山	福井			
	剣道	福井県議会議長杯	金沢	福井	富山	富医	福医	
	柔道	富山県議会議長杯	金沢	福井	富山			
	バスケットボール	福井大学長杯	金沢	富山	福井 富医		福医	
	水泳	福井大学学生部長杯 金沢市議会議長杯	福井	富山	金沢	富医		
	ヨット	石川県議会議長杯	金沢	富山	福井	富医		
	子	準硬式野球	福井大学父兄後援会杯	金沢	福医			
		ハンドボール	金沢大学長杯	金沢	富山	福井	富医	
		空手道	福井市長杯	富山	金沢	福井	富医	
		弓道	富山大学長杯	福井	金沢	富山	富医	
体操		福井市議会議長杯	金沢	福井				
自動車		金沢大学長杯	金沢	富山	福井			
女		陸上競技	富山県体育協会長杯	金沢	富山	福井		
		庭球	石川県議会議長杯	金沢	富山	福井	富医	
		軟式庭球	福井県体育協会長杯	金沢	富山	福井	富医	
		卓球	石川県体育協会長杯	金沢	富山	福井	富医	
	バドミントン	福井県教育委員会杯	金沢	富山	福井	富医		
	バレーボール	富山大学後援会長杯	金沢	富山	富医	福井		
	バスケットボール	富山市議会議長杯	金沢	富山	福井	富医		
	ソフトボール	井村杯・北信杯ソフトボール協会旗	-	-	-	-	-	
	弓道		富山	金沢	福井	富医		
	水泳	福井大学長杯	金沢	富山				

第 32 回 北陸三県大学学生 交 歓 芸 術 祭 日 程 表

(昭和 57 年 10 月 23 日～11 月 28 日)

期日 部門別	10 月		11 月									
	23 日 (土)	24 日 (日)	6 日 (土)	7 日 (日)	13 日 (土)	14 日 (日)	19 日 (金)	20 日 (土)	21 日 (日)	26 日 (金)	27 日 (土)	28 日 (日)
管弦楽					富山大学 黒田講堂	富山市 公会堂						
軽音楽					富山大学 学生会館							
合 唱			富山大学 黒田講堂 富山大学 教養部教室									
能 楽					高岡市 青年の家 (能楽堂)							
美 術								富山県民会館				
書 道										富山市産業奨励館 富山大学 教育学部 教 室		
茶 道							高岡市内 高岡文化センター 大谷会館・大泉寺 永明寺・禅童寺 極楽寺					
放 送								福 恩 寺 (富山市)				
落 語			富山大学 学生会館	昌福寺 (富山市)								
写 真								富山県民会館				
邦 楽	富山大学 学生会館											
		富山大学 教養部 教 室										

昭和 57 年度 後学期専門移行者調

(57. 10. 1 付)

学部	学 科	入学年度	専門教育課程移行者数						移 行 不 許 可 者 数	移行対 象者数
			51	52	53	54	55	56		
文 理	文 学 科									
	理 学 科								1	1
	計								1	1
人 文	人 文 学 科					2	79	81	15	96
	語 学 文 学 科				1		72	73	13	86
	計				1	2	151	154	28	182
教 育	小学校教員養成課程						138	138	2	140
	中学校教員養成課程					3	49	52	3	55
	養護学校教員養成課程					1	18	19	1	20
	幼稚園教員養成課程						30	30		30
	計					4	235	239	6	245
経 済	経 济 学 科				1	4	100	105	20	125
	経 営 学 科			1	1	6	95	103	29	132
	経 営 法 学 科					1	42	43	22	65
	計			1	2	11	237	251	71	322
理	数 学 科					1	35	36	7	43
	物 理 学 科					2	28	30	17	47
	化 学 科					1	30	31	10	41
	生 物 学 科					1	21	22	9	31
	地 球 科 学 科		1			1	22	24	15	39
	計		1			6	136	143	58	201
工	電 気 工 学 科					2	38	40	16	56
	工 業 化 学 科				1	1	35	37	11	48
	金 属 工 学 科			1	2	4	33	40	16	56
	機 械 工 学 科			1		5	30	36	23	59
	生 産 機 械 工 学 科					1	25	26	20	46
	化 学 工 学 科					2	30	32	14	46
	電 子 工 学 科					1	30	31	14	45
	計			2	3	16	221	242	114	356
合 計		1	3	6	39	980	1,029	278	1,307	

昭和57年度 学生教育研究災害傷害保険加入状況

(57.5.1 現在)

学部	学科(課程)	入学年度										計	学部学生数		加入割合	備考
		47年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	教養	専門	計					
文理学部	文学	1										1	5	5	20.0%	
	理学											1	10	11	9.0	
人文学部	計	1										1	10	11	9.0	
	人文学科			4	75	74	90	90	90	90	90	333	178	364	91.1	
	語文学科				84	81	80	79	80	79	79	324	186	352	92.0	
	文学専攻科										7			12	58.3	
教育学部	計			4	159	155	170	176	170	176	664	352	364	728	91.0	
	小学校教員養成課程				139	142	140	140	140	140	561	280	284	564	99.4	
	中学校教員養成課程				47	46	50	50	50	50	193	105	95	200	96.5	
	養護学校教員養成課程			1	19	20	20	20	20	20	80	41	42	83	96.3	
	幼稚園教員養成課程				29	29	30	30	30	30	118	60	61	121	97.5	
	教育専攻科										2			4	50.0	
経済学部	計			1	234	237	240	242	240	242	954	486	482	972	98.0	
	経済学科				117	116	116	120	116	120	469	247	245	492	95.3	
	経営学科				118	130	119	120	119	120	487	252	261	513	94.9	
	経営法学科				60	53	60	60	60	60	233	126	107	233	100	
理学部	計				295	299	295	301	295	301	1,190	625	613	1,239	96.0	
	数学		1		39	40	39	40	39	40	159	85	91	176	90.3	
	物理学			1	38	39	40	40	40	40	158	87	84	171	92.4	
	化学				36	39	36	40	36	40	151	81	81	162	93.2	
	生物				30	28	28	30	28	30	116	61	57	118	98.3	
	地球科学				28	30	30	30	30	30	118	70	58	128	92.2	
	理学研究科						22	27	22	27	49			56	87.5	
	計		1	1	171	176	195	207	195	207	751	384	371	811	93.0	
	電気工学科			1	50	50	50	50	50	50	201	106	111	217	92.6	
	工業化学科		1		41	42	43	45	43	45	172	93	94	187	92.0	
工学部	金属工学科				39	39	39	40	39	40	157	95	80	175	89.7	
	機械工学科		1		49	50	49	50	49	199	110	112	222	89.6		
	生産機械工学科				39	40	39	40	39	158	86	84	170	92.9		
	化学工学科			4	39	39	39	40	39	161	86	85	171	94.2		
	電子工学科			1	42	40	40	40	40	163	85	84	169	96.4		
	工学研究科						28	33	28	33	61			62	98.4	
合計		2	3	6	299	300	327	338	327	1,272	661	650	1,373	93.0		
合計		1	3	12	1,158	1,167	1,227	1,264	1,227	4,832	2,509	2,490	5,134	94.0		

昭和56年度 学生教育研究災害傷害保険利用状況

① 月別事故発生件数

(57. 3. 31 現在)

月	56年				57年				計				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月		12月	1月	2月	3月
件数	1	2	2	3	1	1	1	4	4	4	件	件	26

② 専攻分野別事故発生状況

区分	合計			正課中						課外活動中			学部				大学院													
	専攻分野	計	男女	体育の実技中			理工系の実験実習中			その他			計	男女	1年	2年	3年	4年	1年	2年										
				男	女	計	男	女	計	男	女	計									男	女								
				件	件	件	件	件	件	件	件	件									件	件								
人文学部	2	1	1	1								1		1																
教育学部	8	1	7	6	1	5			2					2			3	2	1											
経済学部	2	2		2														1												
計	12	4	8	9	3	6			2					2			4	3	3	2										
理学部	2		2								2																			
工学部	12	11	1	3	3							7	6	1	1	1	2							2						
計	14	11	3	3	3							9	6	3	1	1	2							2						
合計	26	15	11	12	6	6			3			9	6	3	1	2	6	3	5	11				6	3	5	11			

③ 理工系の実験実習中

事故原因	計	男	女
ガラス器具の破損	1件	件	1件
薬品の付着	3	2	1
機械器具の操作ミス	1	1	
物の移動	4	3	1
計	9	6	3

④ 体育実技中

区分	計	男	女
ソフトボール	2件	2件	件
バスケットボール	4	1	3
バレーボール	1	1	
スキー	3	1	2
飛箱	1		1
柔道	1	1	
計	12	6	6

⑤ その他の正課中

区分	計	男	女
サッカー	1件	1件	件
スキー	2		2
計	3	1	2

⑥ 事故発生場所（どの場所で多いか）

場所	件数	割合
体育館	7件	27%
グラウンド	3	11
実験・実習室	9	35
スキー場	5	19
武道場	2	8
計	26	100

⑦ 傷害種別件数（男女別）

傷害名	計	男	女
捻挫	8件	6件	2件
骨折	7	4	3
打撲	3	1	2
切傷	2	1	1
裂傷	1	1	
火傷	2	1	1
靭帯損傷	1		1
腐蝕	2	1	1
計	26	15	11

⑧ 課外活動中（部活動別件数）

部名	計	男	女
バレーボール	1件	1件	件
柔道	1	1	
計	2	2	

昭和57年度 後期授業料免除について

後期授業料の免除については、さきに開催の授業料等減免選考委員会の選考を経て、出願者696名(学部663名, 大学院30名, 専攻科3名)に対して、423名(学部399名, 大学院21名, 専攻科3名)を許可し、119名(学部113名, 大学院6名)については文部省と免除の是非について協議中である。

(参考) 前期授業料免除実施状況

区 分	出 願 者	許 可 者	不 許 可 者
学 部	566名	488名	78名
大 学 院	39名	29名	10名
専 攻 科	4名	3名	1名
計	609名	520名	89名

◆◆◆ 学園ニュース編集委員 ◆◆◆

学生部長	四 谷 平 治	理 学 部	松 本 賢 一
人文学部	山 口 幸 祐	〃	広 岡 公 夫
〃	釘 貫 亨	工 学 部	多 々 静 夫
教育学部	大 塚 恵 一	〃	杉 本 益 規
〃	山 本 都 久	教 養 部	木 越 治
経済学部	今 井 晴 男	〃	山 本 孝 一
〃	小 原 久 治		